

2021年1月29日



「家計の金融行動に関する世論調査」[単身世帯調査] (2020年)

1. 調査時期 2020年8月21日 (金) ~ 9月2日 (水)
2. 調査対象 全国2,500世帯 (20歳以上70歳未満で、単身世帯を構成する者)
3. 調査方式 インターネットモニター調査

— 目 次 —

【調査要綱】	1
【調査結果の概要】	
I. 金融資産の状況	3
1. 金融資産の保有状況	3
2. 金融資産保有世帯の金融資産保有状況	4
3. 金融資産構成の前年比較	5
4. 金融資産の増減・増減理由	6
5. 金融資産の保有目的	8
6. 金融資産の選択	8
II. 借入金の状況	10
1. 借入金額の状況	10
2. 借入の目的	11
III. 家計のバランス、生活設計等	12
1. 家計のバランス評価	12
2. 生活設計	13
3. 住居の取得計画	13
4. 老後の生活への心配	15
5. 年金に対する考え方	16
IV. 日常の資金決済手段	17
【BOX 1】今回調査の標本属性	18
【BOX 2】平均値と中央値	18

家計の金融行動に関する世論調査は、「二人以上世帯」を「郵送調査」により、「単身世帯」を「インターネットモニター調査」により、それぞれ別々に実施しており、当資料はこのうち「単身世帯」調査についての公表資料である。

1. 調査の目的

この調査は、金融広報中央委員会が、①家計の資産・負債や家計設計などの状況を把握し、これらの公表を通じて金融知識を身につけることの大切さを広報すること、②家計行動分析のための調査データを提供すること、の2つを目的としている。

2. 調査の内容

主な調査項目は次のとおりである。なお、本年調査の具体的な設問内容については、「調査結果（単純集計データ）」を参照。

(1) 金融資産の状況等

金融資産の有無、金融資産保有額、内訳等

(2) 金融負債の状況等

借入金の有無、借入金残高、借入の目的等

(3) 実物資産・住居計画

住居の状況、住宅取得必要資金、この1年以内の土地・住宅の取得、増改築、売却の有無等

(4) 生活設計（老後、消費含む）

家計全体のバランス、過去1年間の家計運営、老後の生活についての考え方等

(5) 決済手段

日常的な支払いの主な資金決済手段、平均手持ち現金残高等

(6) 金融制度等

預金保険制度の認知度、金融機関の選択理由等

3. 調査対象モニター世帯の選定方法

(1) 対象世帯は、20歳以上70歳未満で、単身で世帯を構成する者（単身赴任等一時的に単身世帯を構成する者は除く）。

(2) モニター数は2,500を有効回収数として確保する設計とし、直近（平成27年）の国勢調査の単独世帯*データにおける、地域別（9地域）、年代別（5区分）、男女別の構成比に基づき回答者

割付けを行なった（次頁、モニター構成①参照）。

* 平成27年国勢調査における人口等基本集計の都道府県結果、第14-1表「世帯人員（2区分）、世帯主との続き柄（12区分）、配偶関係（4区分）、年齢（5歳階級）、男女別一般世帯人員（全国、都道府県）の「1人の一般世帯（単独世帯）」（未婚・離別・死別）の数値を使用。

(3) 調査委託会社にモニター登録している者の中から、上記(1)の条件を満たすモニター構成割付を確保するよう無作為に抽出。この結果、すべての割付セルにおいて国勢調査に基づくモニター構成と同一のモニター構成となった（次頁、モニター構成②参照）。

調査要綱

〔モニター構成〕

① 国勢調査に基づくモニター構成の設計

		合計	20代	30代	40代	50代	60代
全国	合計	2,500	646	438	440	395	581
	男性	1,454	380	273	279	235	287
	女性	1,046	266	165	161	160	294
北海道	男性	71	18	13	14	12	14
	女性	65	15	10	10	11	19
東北	男性	82	21	13	14	15	19
	女性	61	16	8	8	10	19
関東	男性	587	151	124	120	91	101
	女性	382	104	71	64	53	90
北陸	男性	45	13	7	8	7	10
	女性	31	8	4	4	5	10
中部	男性	199	55	38	38	31	37
	女性	114	30	16	17	18	33
近畿	男性	211	52	36	41	35	47
	女性	172	40	25	27	27	53
中国	男性	77	23	13	13	12	16
	女性	59	16	8	8	9	18
四国	男性	35	9	5	6	6	9
	女性	30	6	4	4	5	11
九州	男性	147	38	24	25	26	34
	女性	132	31	19	19	22	41

② 今次調査における有効回収モニター構成の結果

		合計	20代	30代	40代	50代	60代
全国	合計	2,500	646	438	440	395	581
	男性	1,454	380	273	279	235	287
	女性	1,046	266	165	161	160	294
北海道	男性	71	18	13	14	12	14
	女性	65	15	10	10	11	19
東北	男性	82	21	13	14	15	19
	女性	61	16	8	8	10	19
関東	男性	587	151	124	120	91	101
	女性	382	104	71	64	53	90
北陸	男性	45	13	7	8	7	10
	女性	31	8	4	4	5	10
中部	男性	199	55	38	38	31	37
	女性	114	30	16	17	18	33
近畿	男性	211	52	36	41	35	47
	女性	172	40	25	27	27	53
中国	男性	77	23	13	13	12	16
	女性	59	16	8	8	9	18
四国	男性	35	9	5	6	6	9
	女性	30	6	4	4	5	11
九州	男性	147	38	24	25	26	34
	女性	132	31	19	19	22	41

4. 調査の方法

(1) 対象モニターに調査依頼のインターネットメールを送付し、対象モニターが、指定のURLにアクセスすることによって、インターネット（Web）画面上から調査アンケート票に回答入力する調査方法（インターネット調査）。

(2) 調査の実施および結果の集計は、株式会社インテージに委託した。

5. 調査の時期

2020年8月21日（金）～9月2日（水）

本調査についての照会先

金融広報中央委員会

（事務局 日本銀行情報サービス局内）

電話 03（3279）1111（代）

[共通の注] 過去データの不連続の詳細については時系列表参照。

【調査結果の概要】

I. 金融資産の状況

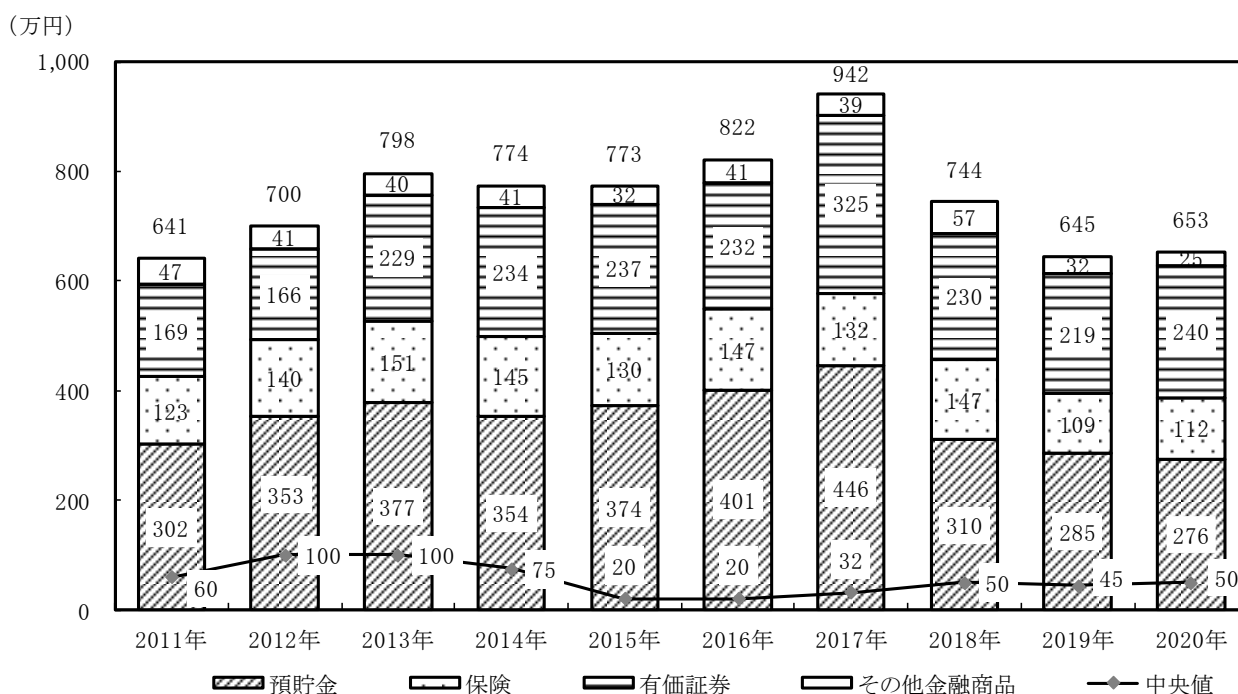
1. 金融資産の保有状況

- 金融資産（注1）の保有額は、平均値は653万円と前回（645万円）比上昇した。また、中央値（注2）は、50万円と前回（45万円）比上昇した[図表1]。

(注1) 本調査では「金融資産」について、『定期性預金・普通預金等の区分にかかわらず、運用の為または将来に備えて蓄えている部分とする。ただし、商・工業や農・林・漁業等の事業のために保有している金融資産や、土地・住宅・貴金属等の実物資産、現金、預貯金で日常的な出し入れ・引落しに備えている部分は除く』と調査票に表記している。

(注2) 18ページの「【BOX2】平均値と中央値」参照。

(図表1) 金融資産の保有額<問2(a)>



(参考)

- 金融商品（注）を「いずれも保有していない」と回答した世帯は、5.1%（前回5.4%）となった。

(注) 「金融資産」(注1)に「預貯金で日常的な出し入れ・引落しに備えている部分」を加えたもの。

▼金融商品を「いずれも保有していない」と回答した世帯の比率<問1(b)>

(%)

	2018年	2019年	2020年
金融商品を「いずれも保有していない」と回答した世帯の比率	5.6	5.4	5.1

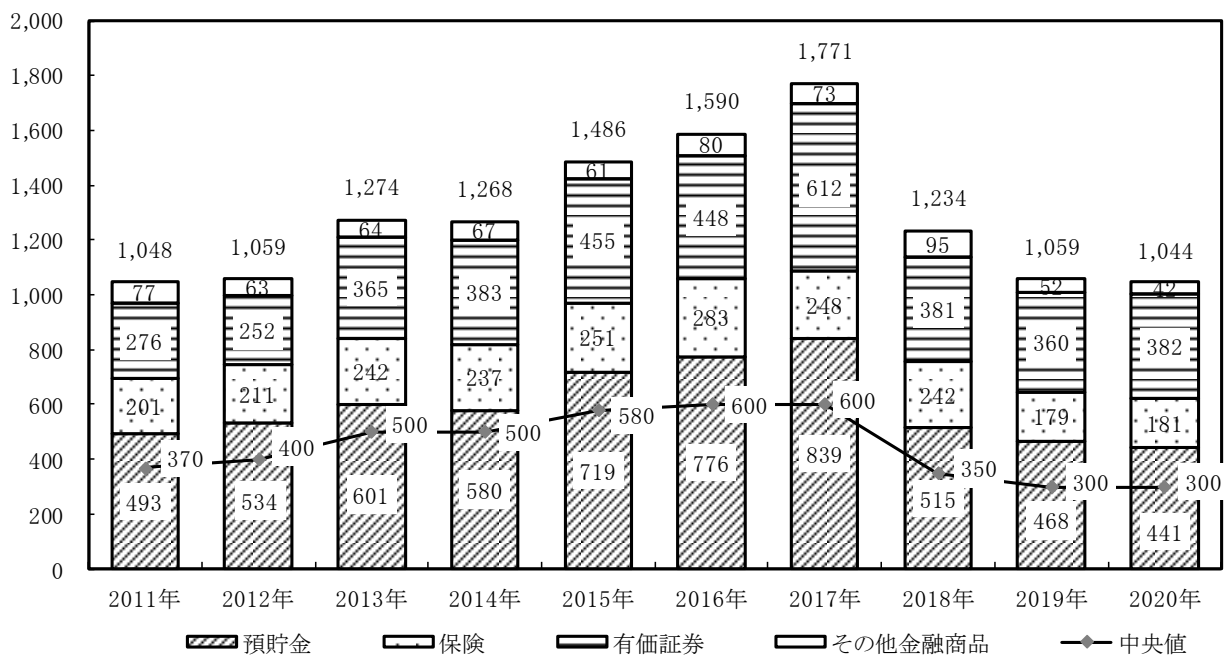
2. 金融資産保有世帯の金融資産保有状況

- 金融資産保有世帯の金融資産保有額は、平均値は1,044万円と前回(1,059万円)比減少した。また、中央値は300万円(前回300万円)となった[図表2]。
- 金融商品別の構成比をみると、預貯金が42.2%と前回(44.2%)比低下した。他方、有価証券(債券、株式、投資信託)は36.6%と前回(34.0%)比上昇した。また、生命保険が8.5%(前回8.4%)、個人年金保険が7.9%(前回7.7%)となった。
- なお、一般NISAを保有している世帯における平均保有額は、176万円と前回(181万円)比減少した。

(図表2) 金融資産の保有額<問2(a)>

<金融資産保有世帯>

(万円)



(金融商品別構成比)

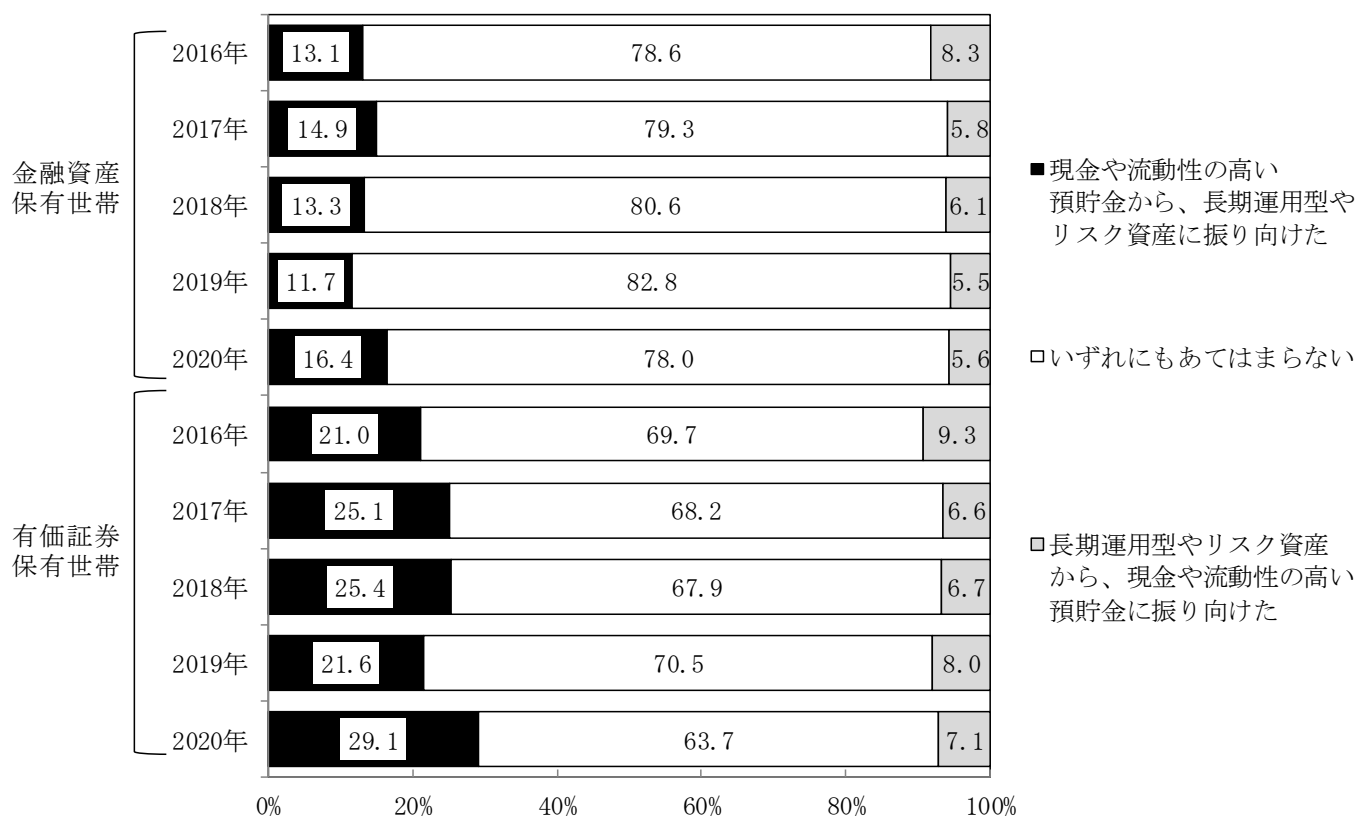
	(%)													(参考) 保有一般 NISA (注)
	預貯金	うち うち 定期性	金銭 信託	生命 保険	損害 保険	個人 年金	有価 証券	債券	株 式	投資 信託	財形 貯蓄	その他		
2017年	47.3	25.1	0.5	6.6	0.8	6.6	34.5	6.8	18.8	8.9	1.8	1.8	157	
2018年	41.7	23.5	2.6	9.6	0.9	9.1	30.9	3.7	17.8	9.3	1.1	4.1	168	
2019年	44.2	22.9	0.8	8.4	0.8	7.7	34.0	5.0	16.2	12.7	1.3	2.8	181	
2020年	42.2	19.9	0.7	8.5	1.0	7.9	36.6	5.7	20.6	10.3	1.4	1.9	176	
2019年 の実額(万円)	468	243	8	89	8	82	360	53	172	135	14	30		
2020年 の実額(万円)	441	208	7	89	10	82	382	59	215	108	15	20		

(注) 一般NISAを保有している世帯(全体の10.1%)の平均値。

3. 金融資産構成の前年比較

- 金融資産保有世帯において、金融資産構成を前年と比較して「現金や流動性の高い預貯金から、長期運用型やリスク資産に振り向けた」とした世帯は16.4%と前回（11.7%）比上昇した。他方、「長期運用型やリスク資産から、現金や流動性の高い預貯金に振り向けた」とした世帯は5.6%（前回5.5%）となった[図表3]。
- また、有価証券保有世帯（債券・株式・投資信託のいずれかの保有額が1万円以上の世帯）でみると、「現金や流動性の高い預貯金から、長期運用型やリスク資産に振り向けた」とした世帯は29.1%と前回（21.6%）比上昇した。他方、「長期運用型やリスク資産から、現金や流動性の高い預貯金に振り向けた」とした世帯は7.1%（前回8.0%）となった。

(図表3) 金融資産構成の前年比較<問4>



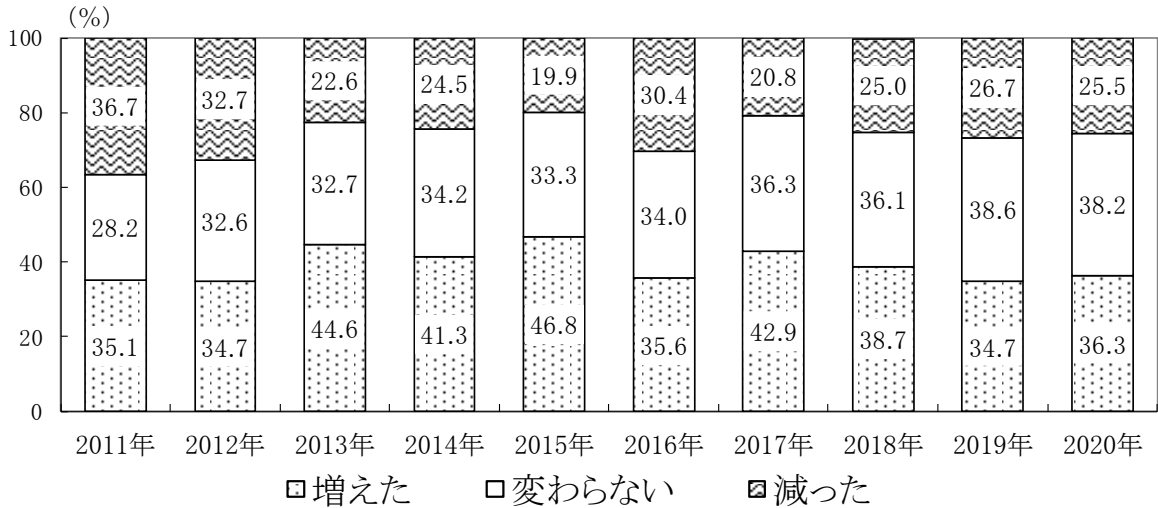
4. 金融資産の増減・増減理由

- 金融資産保有世帯において、現在の金融資産残高が1年前と比べ「増えた」と回答した世帯は36.3%と前回(34.7%)比上昇した。他方、「減った」と回答した世帯は25.5%と前回(26.7%)比減少した[図表4]。

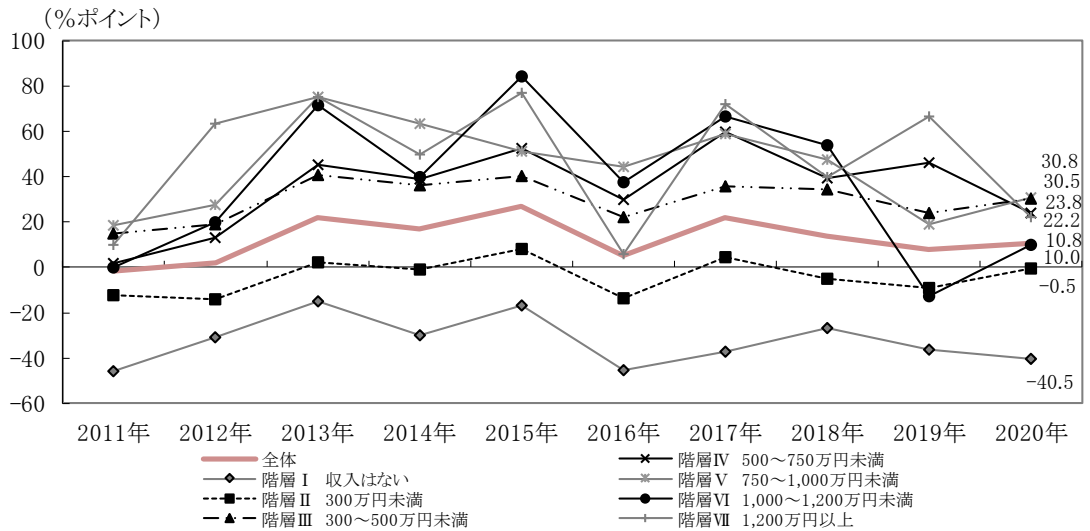
(図表4) 1年前と比較した金融資産残高の増減<問7>

<金融資産保有世帯>

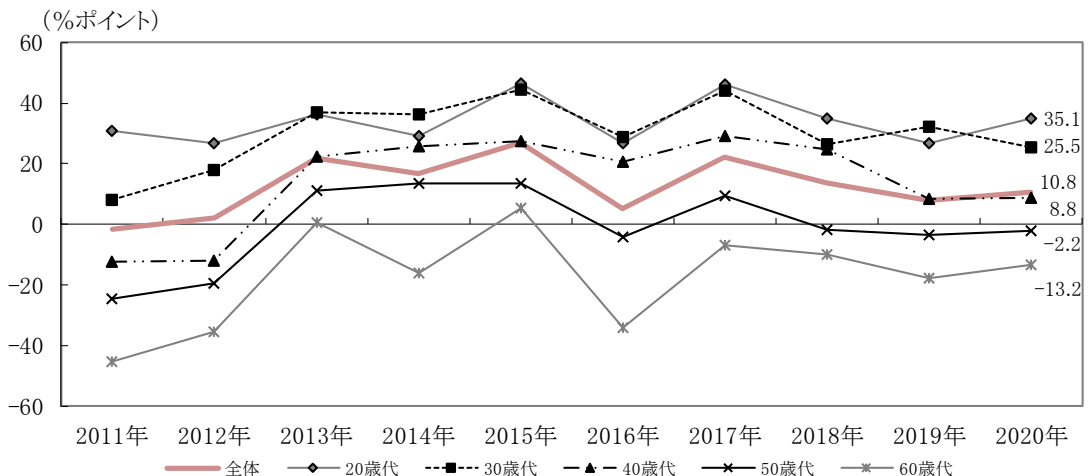
(全体)



(年間収入別)「増えた」－「減った」・%ポイント

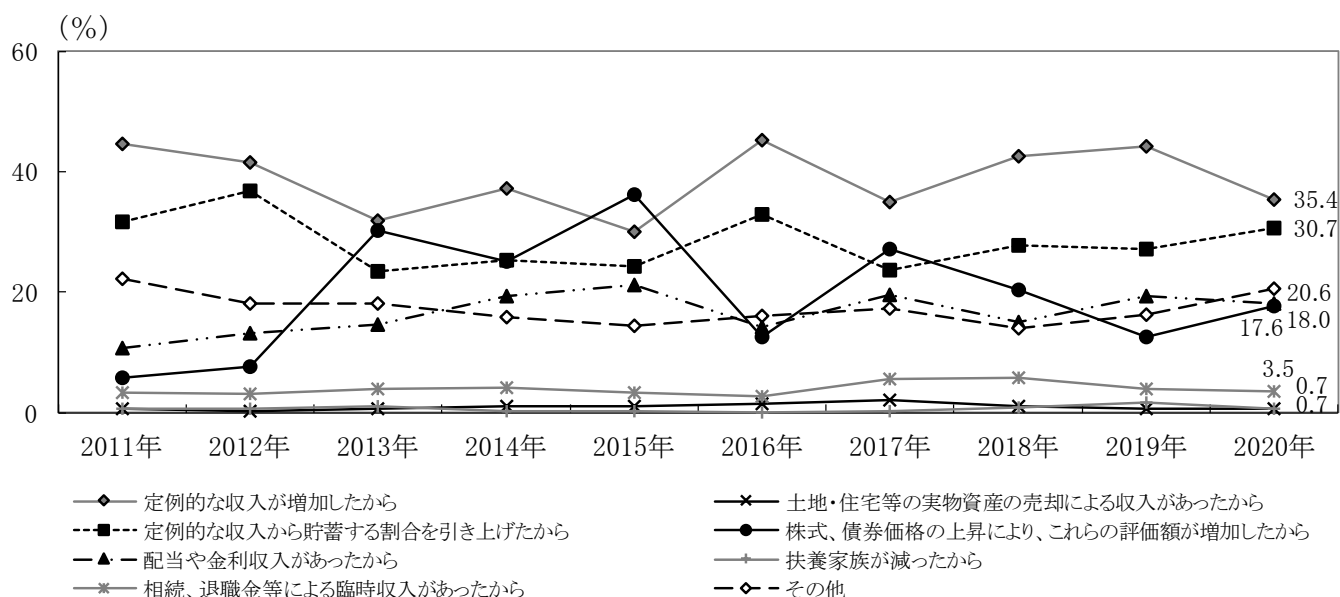


(年令別)「増えた」－「減った」・%ポイント

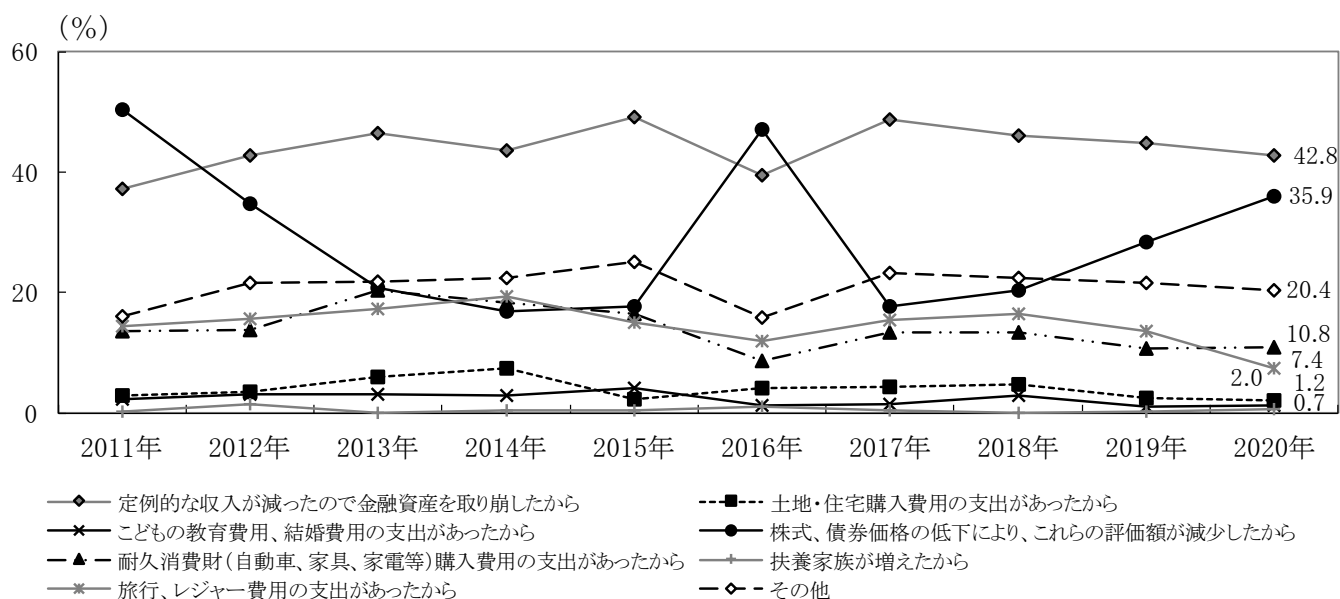


- 金融資産残高が増加した世帯では、その理由について「定例的な収入が増加したから」、「配当や金利収入があったから」が35.4%、18.0%と前回（各44.2%、19.3%）比低下した。他方、「定例的な収入から貯蓄する割合を引き上げたから」、「株式、債券価格の上昇により、これらの評価額が増加したから」が30.7%、17.6%と前回（各27.1%、12.6%）比上昇した[図表5]。
- 金融資産残高が減少した世帯では、その理由について「定例的な収入が減ったので金融資産を取り崩したから」が42.8%と最も高いが、前回（44.9%）比低下した。次いで「株式、債券価格の低下により、これらの評価額が減少したから」が35.9%と前回（28.3%）比上昇した[図表6]。

(図表5) 金融資産残高の増加理由（複数回答）＜問8(a)＞
 ＜金融資産保有世帯＞のうち＜1年前に比べ金融資産残高が増えた世帯＞



(図表6) 金融資産残高の減少理由（複数回答）＜問8(b)＞
 ＜金融資産保有世帯＞のうち＜1年前に比べ金融資産残高が減った世帯＞

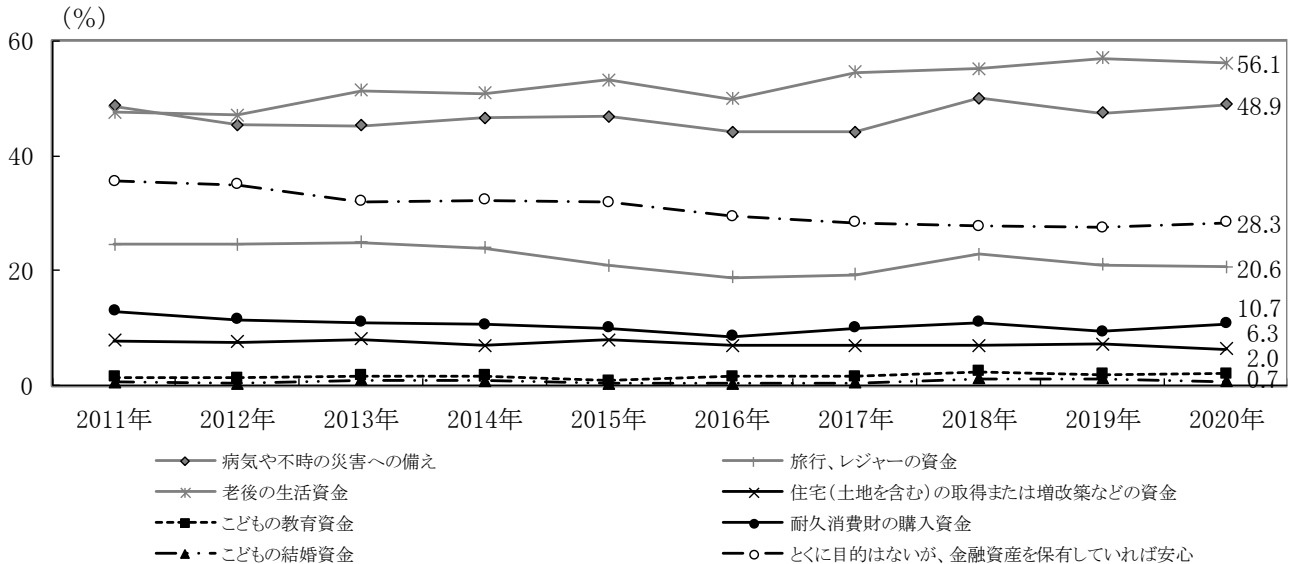


5. 金融資産の保有目的

- 金融資産の保有目的では、「老後の生活資金」が56.1%と最も高いが、前回(57.0%)比低下した。次いで、「病気や不時の災害への備え」が48.9%と前回(47.4%)比上昇した[図表7]。

(図表7) 金融資産の保有目的(3つまでの複数回答) <問9>

<金融資産保有世帯>



6. 金融資産の選択

- 金融商品の選択の際に最も重視していることは、「元本が保証されているから」が19.6%(前回20.3%)と最も高い。次いで、「利回りが良いから」が19.3%(前回19.7%)となった[図表8]。
- これを「安全性」、「流動性」、「収益性」の3基準(注)に分けてみると、「収益性」を重視する回答が34.7%と最も高く、前回(32.3%)比上昇した。次いで、「安全性」が24.6%となったが、前回(27.2%)比低下した。他方、「流動性」が20.7%(前回20.8%)となった。

(注) ここでは、「安全性」、「流動性」、「収益性」に関わる項目をそれぞれ下記のように分類。

安全性: 「元本が保証されているから」および「取扱金融機関が信用できて安心だから」

流動性: 「現金に換えやすいから」および「少額でも預け入れや引き出しが自由にできるから」

収益性: 「利回りが良いから」および「将来の値上がり期待できるから」

(図表8) 金融商品を選択する際に重視すること <問5>

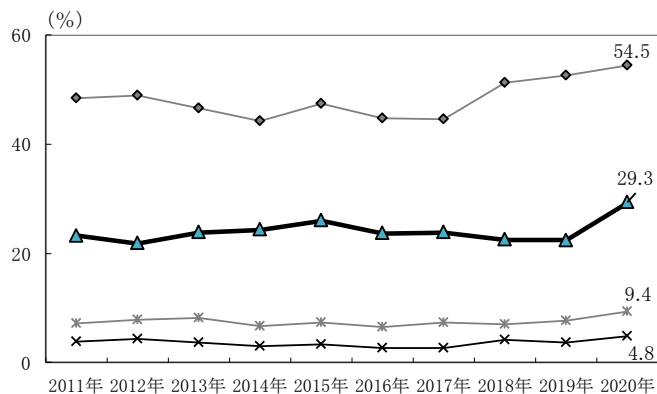
<金融資産保有世帯>

	(%)									
	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
収益性	28.0	27.7	30.0	31.7	34.5	32.9	33.1	32.1	32.3	34.7
利回りが良い	18.1	19.5	20.1	21.7	20.7	18.3	19.8	19.6	19.7	19.3
将来の値上がり期待できる	9.9	8.2	9.9	10.1	13.8	14.6	13.3	12.5	12.5	15.4
安全性	32.2	32.1	34.5	30.4	32.5	31.7	31.1	29.6	27.2	24.6
元本が保証されている	23.6	23.6	25.4	24.1	26.1	26.6	25.9	23.5	20.3	19.6
取扱金融機関が信用できて安心	8.6	8.6	9.0	6.3	6.4	5.1	5.2	6.1	6.8	5.0
流動性	24.1	24.4	20.3	21.4	17.3	18.7	17.8	20.7	20.8	20.7
現金に換えやすい	7.2	8.2	7.2	7.9	6.6	8.8	6.4	8.0	7.5	8.5
少額でも預け入れや引き出しが自由にできる	16.8	16.2	13.1	13.5	10.6	9.9	11.4	12.7	13.2	12.3
商品内容が理解しやすい	5.5	4.9	4.5	4.6	5.2	5.6	5.2	4.3	4.8	5.9
その他	10.2	10.9	10.8	11.8	10.6	11.1	12.8	13.4	15.0	14.0

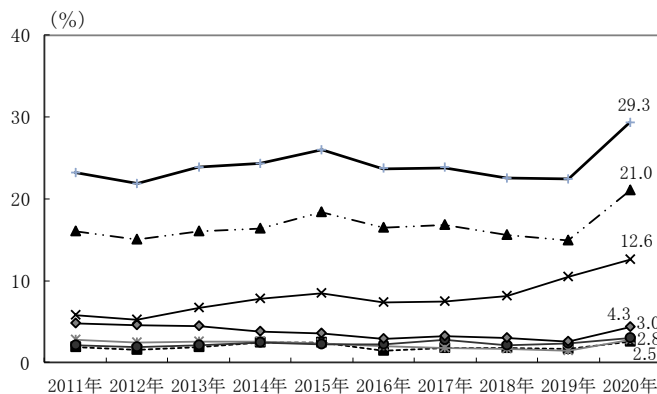
・ 今後保有を希望する金融商品は、預貯金が 54.5%と最も高く、前回 (52.6%) 比上昇した。また、いずれかの有価証券の保有を希望している世帯は 29.3%で、前回 (22.4%) 比上昇となった。有価証券の中では、株式が 21.0%、株式投資信託が 12.6%と前回 (各 14.9%、10.4%) 比上昇した[図表 9]。

(図表 9) 金融商品の保有希望 (複数回答) <問 1 2>

<預貯金・保険・有価証券>

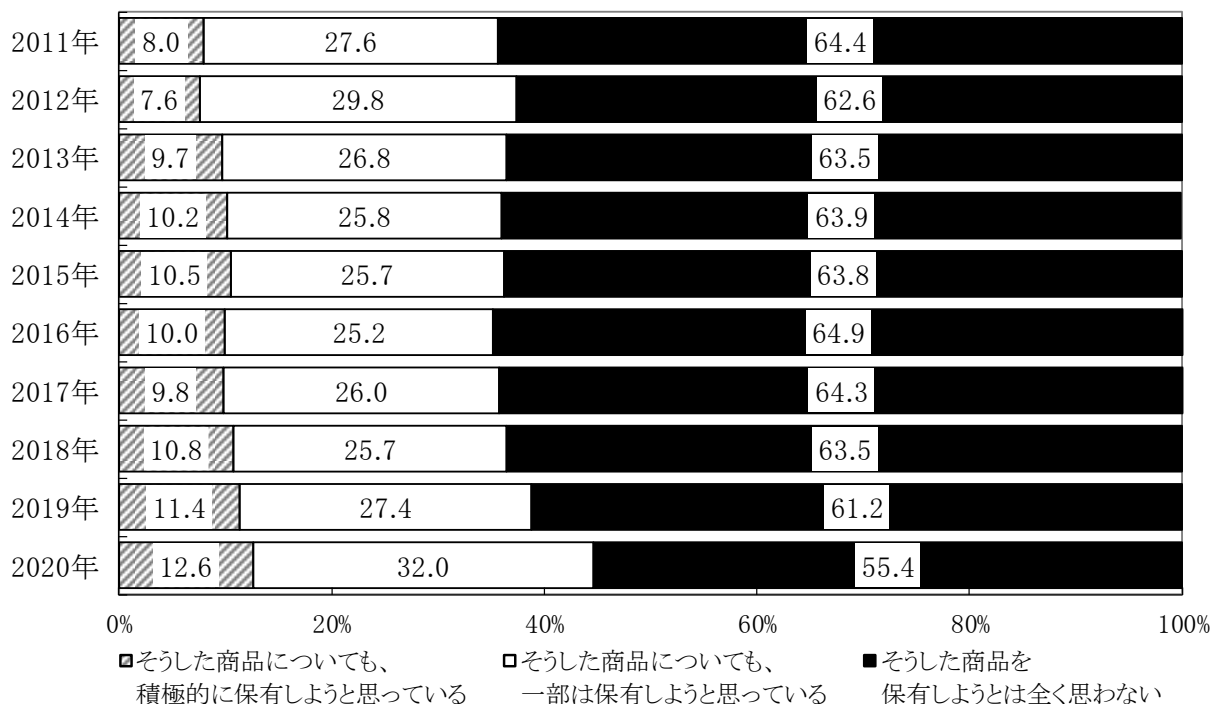


<有価証券の内訳>



・ 元本割れを起こす可能性があるが、収益性の高いと見込まれる金融商品の保有については、「そうした商品を保有しようとは全く思わない」が 55.4%と最も高いが、前回 (61.2%) 比低下した。他方、「そうした商品についても、一部は保有しようと思っている」、「そうした商品についても、積極的に保有しようと思っている」は 32.0%、12.6%と前回 (各 27.4%、11.4%) 比上昇した[図表 10]。

(図表 10) 元本割れを起こす可能性があるが、収益性の高いと見込まれる金融商品の保有<問 1 3>

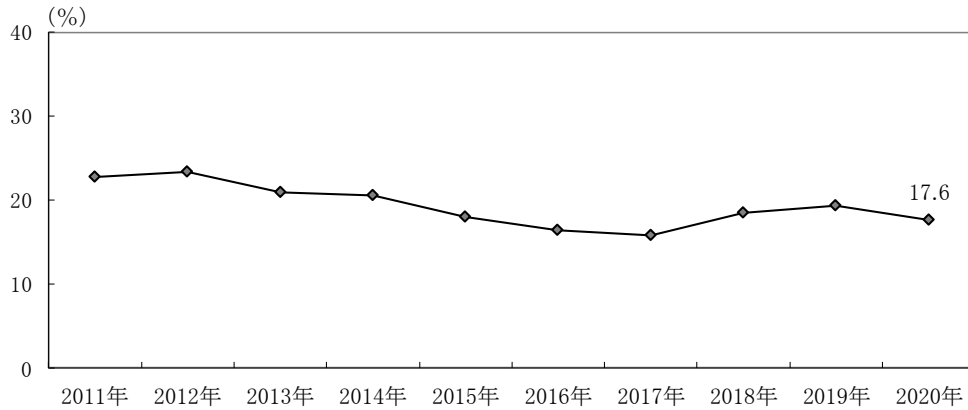


Ⅱ. 借入金の状況

1. 借入金額の状況

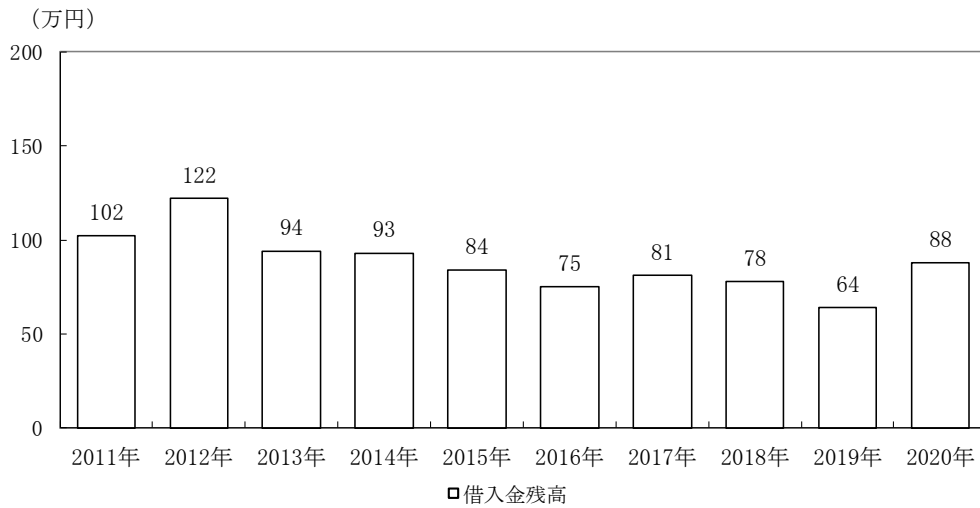
- ・ 借入金のある世帯の割合は 17.6%と前回（19.3%）比低下した[図表 1 1]。
- ・ 借入金のない世帯も含む全世界帯では、借入金の平均額は 88 万円と前回（64 万円）比増加した[図表 1 2]。
- ・ 借入金のある世帯のみでは、借入金の平均額は 513 万円と前回（341 万円）比増加した。このうち住宅ローンは 326 万円と前回（180 万円）比増加した。また、借入金額の中央値は 100 万円（前回 100 万円）となった。

(図表 1 1) 借入金のある世帯<問 1 5>

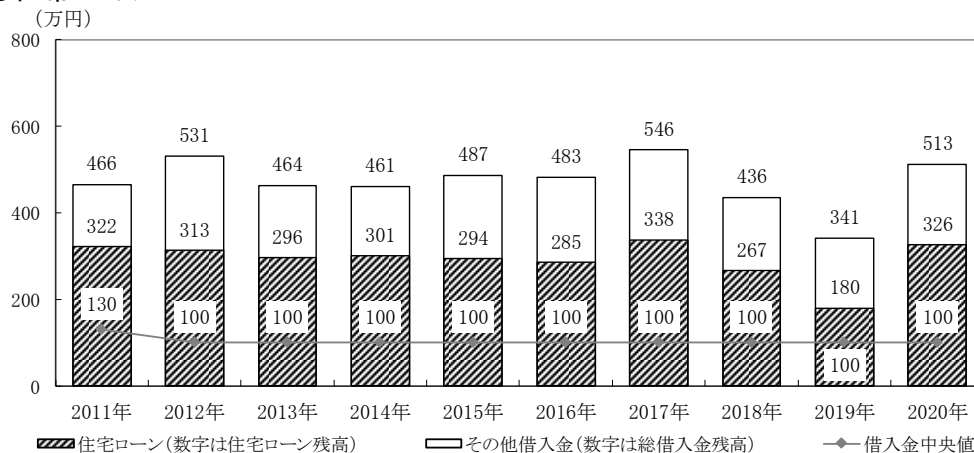


(図表 1 2) 借入金の平均額（うち住宅ローンを含む）<問 1 6>

<全世界帯（借入金のない世帯も含む）>



<借入金のある世帯のみ>

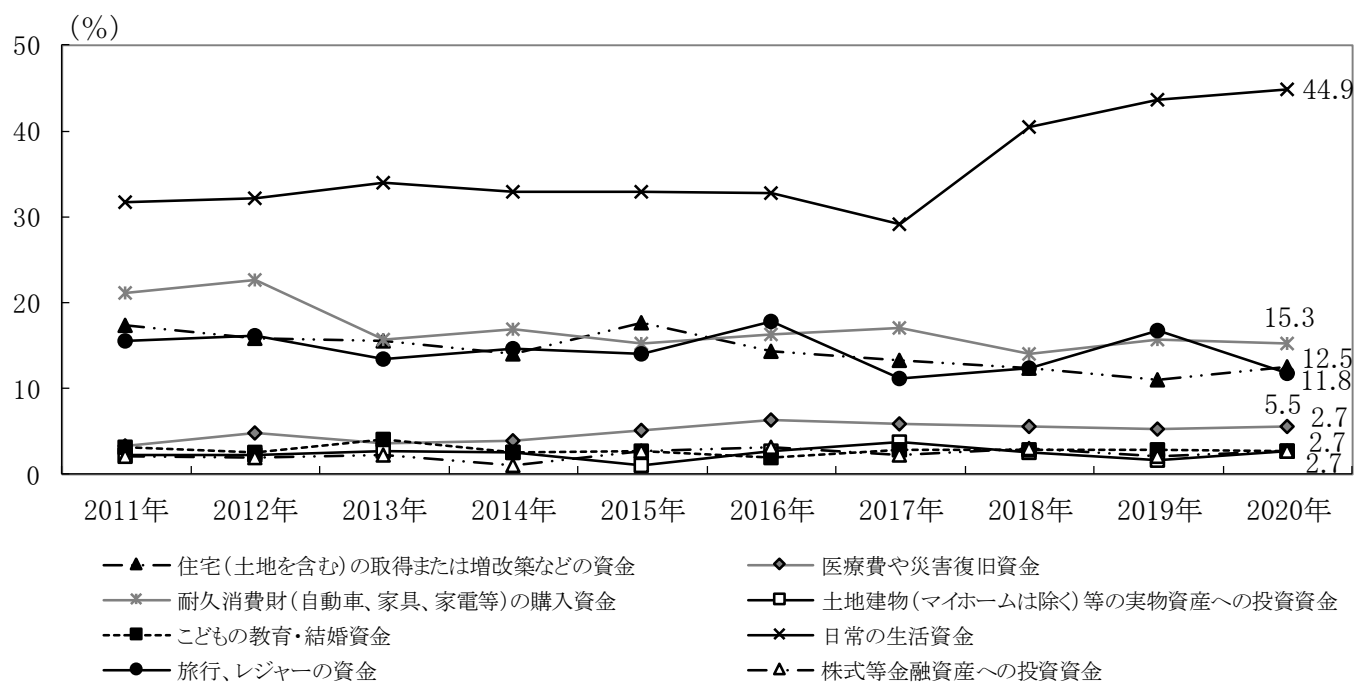


2. 借入の目的

- 借入の目的については、「日常の生活資金」が44.9%と最も高く、前回（43.7%）比上昇した。次いで、「耐久消費財の購入資金」が15.3%（前回15.7%）となった。他方、「旅行、レジャーの資金」は11.8%と前回（16.8%）比低下した[図表13]。

(図表13) 借入の目的（3つまでの複数回答）〈問17〉

〈借入金のある世帯〉

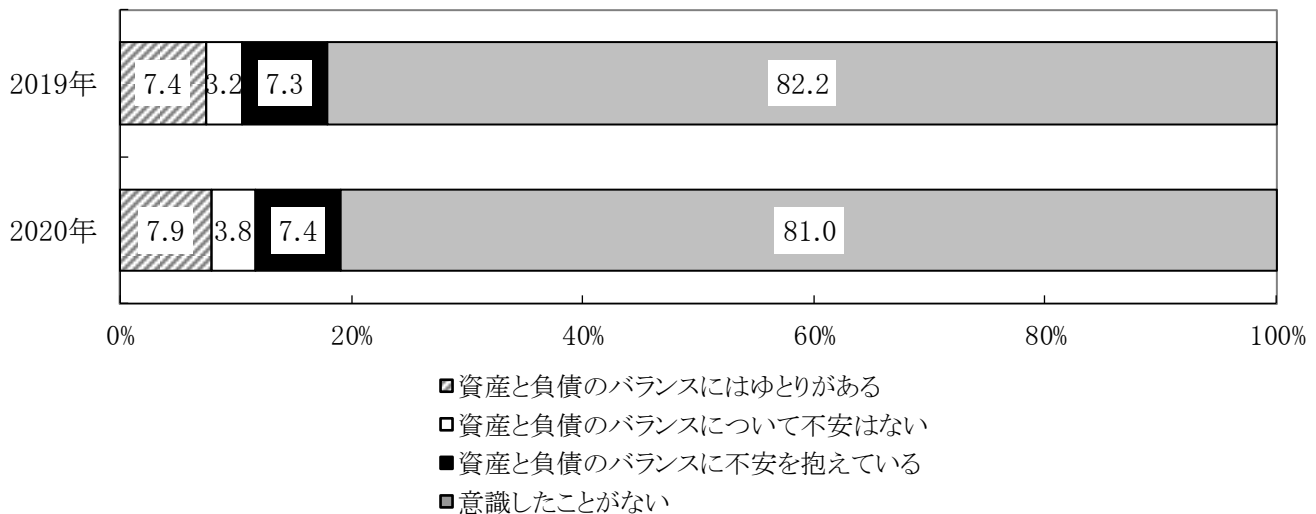


Ⅲ. 家計のバランス、生活設計等

1. 家計のバランス評価

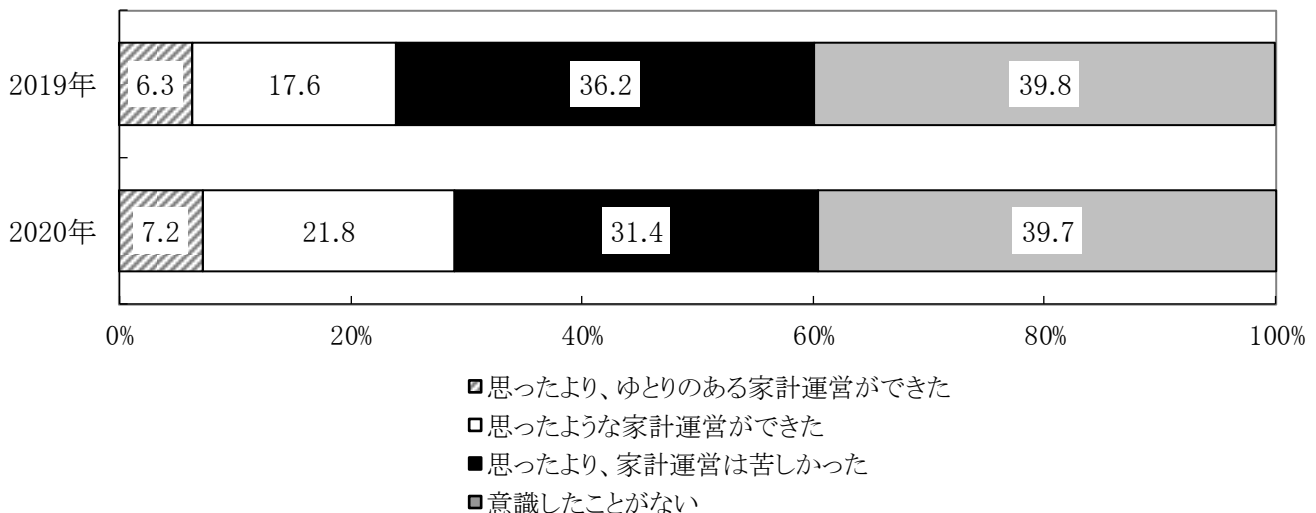
- ・ 家計の資産負債バランスの評価について、「意識したことがない」とした世帯は81.0%と、前回(82.2%)比減少した[図表14]。
- ・ 意識している世帯では、「資産と負債のバランスにはゆとりがある」もしくは「資産と負債のバランスについて不安はない」とした世帯は合わせて11.7%(前回10.6%)と上昇した。また、「資産と負債のバランスに不安を抱えている」とした世帯は7.4%(前回7.3%)となった。

(図表14) 家計の資産負債バランス評価<問18(a)>



- ・ 過去1年間の家計運営の評価については、「思ったより、家計運営は苦しかった」とした世帯は31.4%で前回(36.2%)比低下した。「思ったより、ゆとりのある家計運営ができた」もしくは「思ったような家計運営ができた」とした世帯は合わせて29.0%で前回(23.9%)比上昇した。他方、「意識したことがない」とした世帯は39.7%(前回39.8%)となった[図表15]。

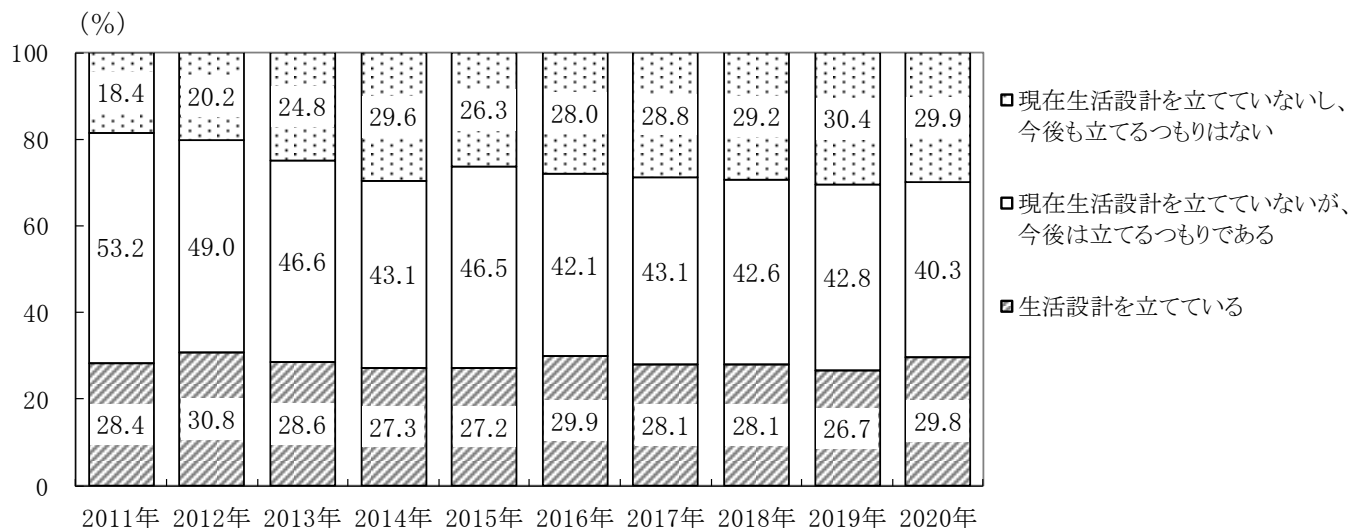
(図表15) 家計運営の評価<問18(b)>



2. 生活設計

- 生活設計策定の有無については、「現在生活設計を立てていないが、今後は立てるつもりである」世帯が40.3%と前回(42.8%)比低下した。「生活設計を立てている」世帯は29.8%と前回(26.7%)比上昇した。他方、「現在生活設計を立てていないし、今後も立てるつもりはない」世帯は29.9%(前回30.4%)となった[図表16]。

(図表16) 生活設計策定の有無<問19(a)>



3. 住居の取得計画

- 自家取得予定時期については、『10年以内』(「今後3年以内」と「5年以内」と「10年以内」の合計)を予定している世帯が15.0%と前回(13.7%)比上昇した。他方、「将来にわたりマイホームを取得する考えはない」とした世帯は43.3%(前回43.0%)となった[図表17]。

(図表17) 自家取得予定時期<問21>

<非持家世帯>

(%)

	2018年	2019年	2020年
今後3年以内	3.0	2.4	2.3
5年以内	4.1	4.2	4.2
10年以内	7.3	7.1	8.5
20年以内	3.1	3.4	3.0
20年より先	1.1	1.1	1.1
親からの相続等によるので、いつになるかわからない	4.8	4.8	5.1
マイホームの取得については目下のところ考えていない	34.2	34.0	32.5
将来にわたりマイホームを取得する考えはない	42.3	43.0	43.3

- ・ マイホームの取得予定金額としては、必要資金総額が 2,598 万円、うち自己資金が 1,366 万円、借入金が 1,232 万円となった[図表 18]。

(図表 18) マイホームの取得予定金額<問 22>
<マイホームを取得ないし買い換える予定がある世帯>

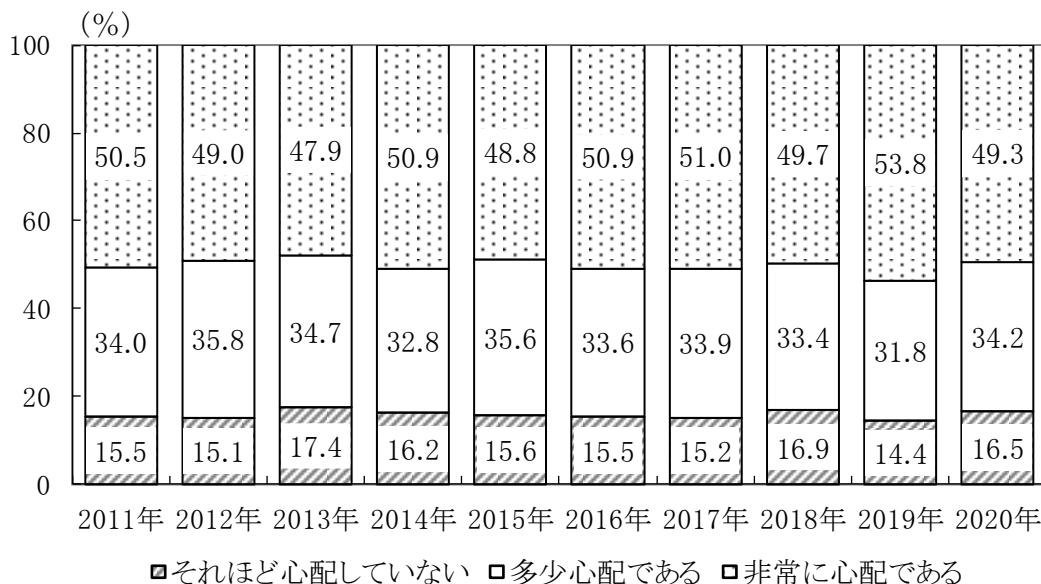
(万円)

必要資金総額	2,598
うち自己資金	1,366
借入金	1,232

4. 老後の生活への心配

・ 老後の生活について『心配である』（「非常に心配である」と「多少心配である」の合計）と回答した世帯は、83.5%と前回（85.6%）比低下した。他方、「それほど心配していない」は16.5%と前回（14.4%）比上昇した[図表19]。

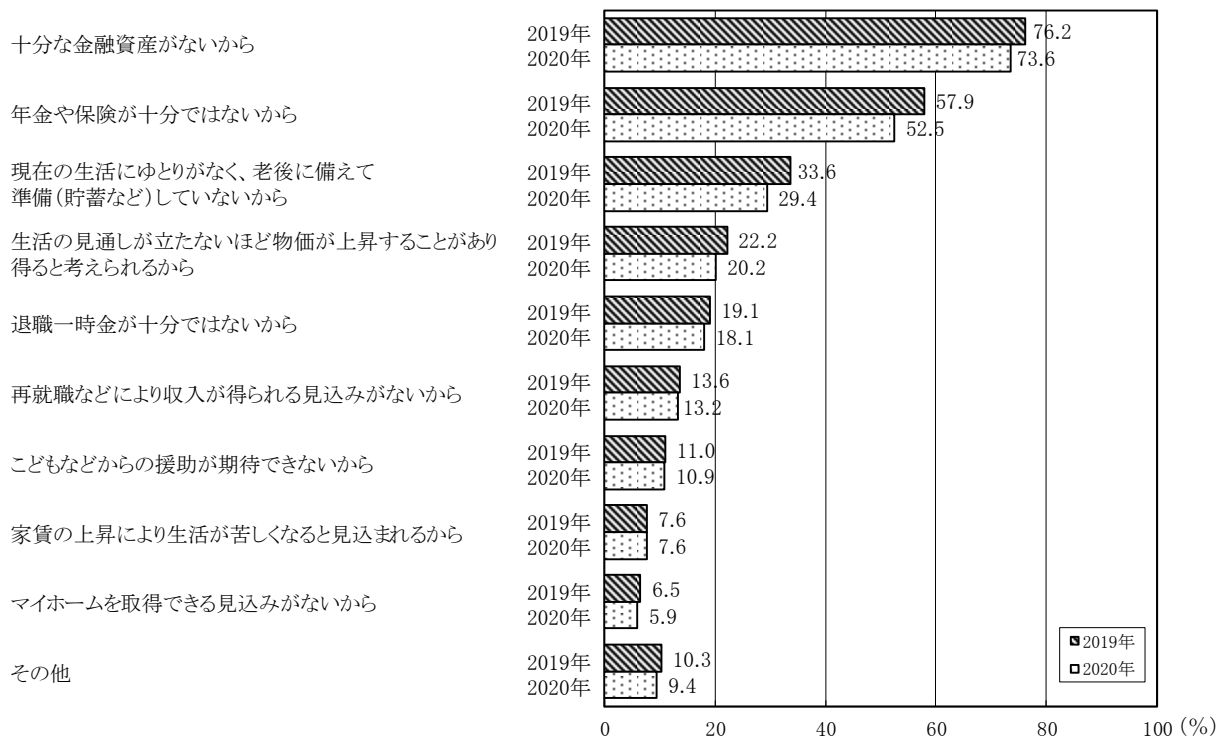
（図表19）老後の生活への心配<問26>



・ 『心配である』としている世帯では、その理由について「十分な金融資産がないから」が73.6%と最も高く、次いで「年金や保険が十分ではないから」が52.5%となったが、前回（各76.2%、57.9%）比低下した[図表20]。

（図表20）老後の生活を心配している理由（複数回答）<問28>

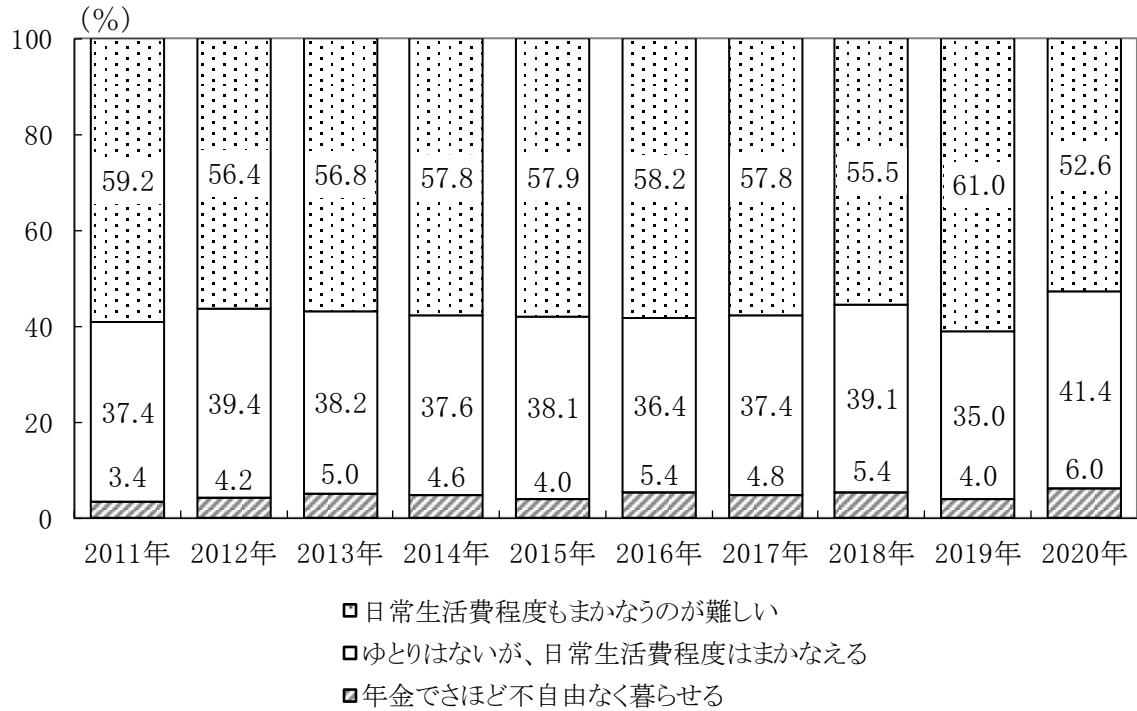
<老後を心配している世帯>



5. 年金に対する考え方

- 年金に対する考え方については、「日常生活費程度もまかなうのが難しい」と回答した世帯は52.6%と前回（61.0%）比低下した。他方、「ゆとりはないが、日常生活費程度はまかなえる」と回答した世帯は41.4%と前回（35.0%）比上昇した〔図表21〕。

（図表21）年金に対する考え方＜問29(b)＞



- 老後の生活費の収入源は、「公的年金」が58.4%と最も高く、次いで「就業による収入」が52.6%となったが、前回（各59.2%、54.3%）比低下した〔図表22〕。

（図表22）老後の生活費の収入源（3つまでの複数回答）＜問29(a)＞

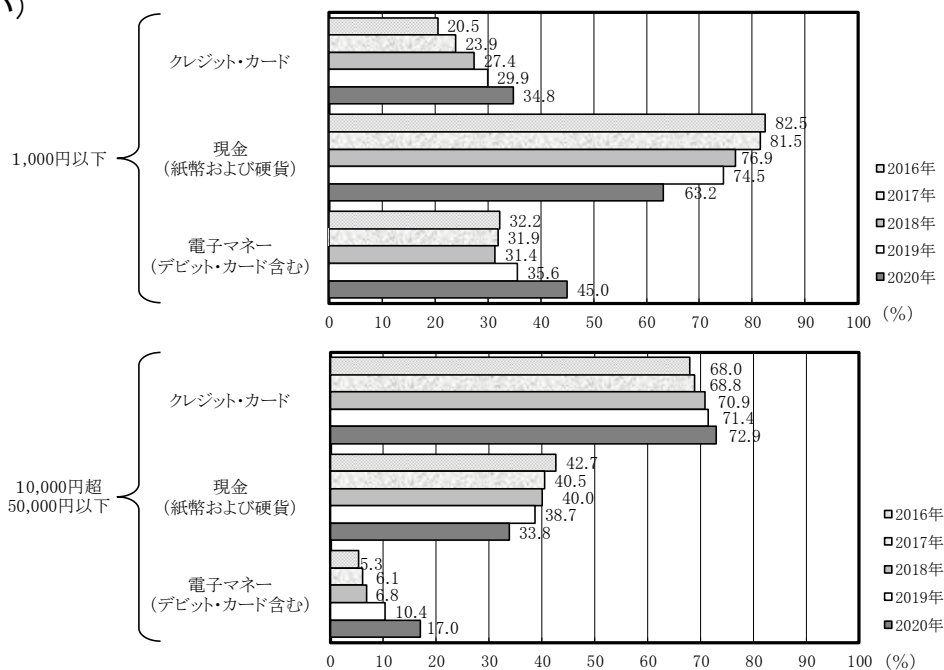
	（%）		
	2018年	2019年	2020年
就業による収入	51.3	54.3	52.6
公的年金	60.8	59.2	58.4
企業年金、個人年金、保険金	29.8	30.0	30.1
金融資産の取り崩し	24.2	24.2	24.7
利子配当所得	7.5	8.0	7.7
不動産収入(家賃、地代等)	4.6	3.0	4.2
子どもなどからの援助	0.8	0.9	1.0
国や市町村などからの公的援助	9.3	11.4	10.2
その他	12.7	11.5	10.8

IV. 日常の資金決済手段

- ・ 日常的な支払い（買い物代金等）の主な資金決済手段については、1,000円以下の小口決済では、「現金」が63.2%と前回（74.5%）比低下した一方、「電子マネー」、「クレジットカード」は45.0%、34.8%と前回（各35.6%、29.9%）比上昇した。10,000円超50,000円以下では、「クレジットカード」、「電子マネー」が72.9%、17.0%と前回（各71.4%、10.4%）比上昇した。他方、「現金」は33.8%と前回（38.7%）比低下した〔図表23〕。
- ・ 定期的な支払い（公共料金等）の主な資金決済手段については、「クレジットカード」が56.4%と前回（54.8%）比上昇した一方、「口座振替」が43.2%と前回（47.6%）比低下した。「現金」は31.9%（前回32.0%）となった。

(図表23) 金額別の主な資金決済手段（2つまでの複数回答）〈問14(a)、(b)〉

(日常的な支払い)

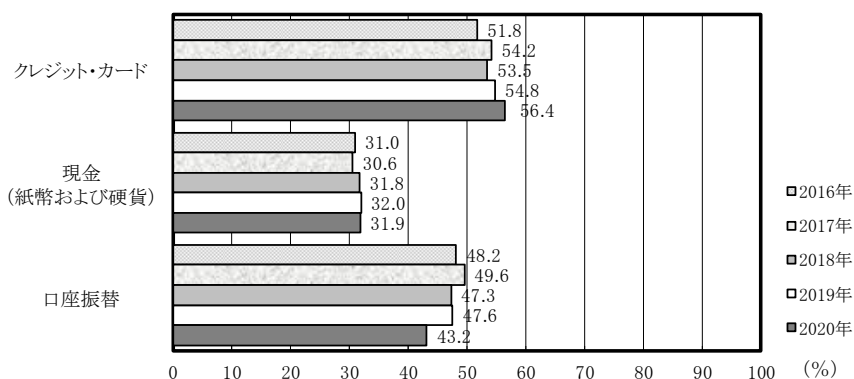


(参考) 今回調査における金額階層別内訳

(%)

金額階層	現金 (紙幣および 硬貨)	クレジット・ カード	電子マネー (デビット・ カード含む)	その他
1,000円以下	63.2	34.8	45.0	3.7
1,000円超5,000円以下	51.1	53.5	38.6	2.8
5,000円超10,000円以下	41.8	65.4	27.5	2.7
10,000円超50,000円以下	33.8	72.9	17.0	3.6
50,000円超	26.2	73.8	11.0	5.1

(定期的な支払い)



【BOX 1】今回調査の標本属性 ※標本属性の集計結果は、【調査結果（単純集計データ）】39頁参照。

今回調査の標本属性についてみると、次のとおりとなった。

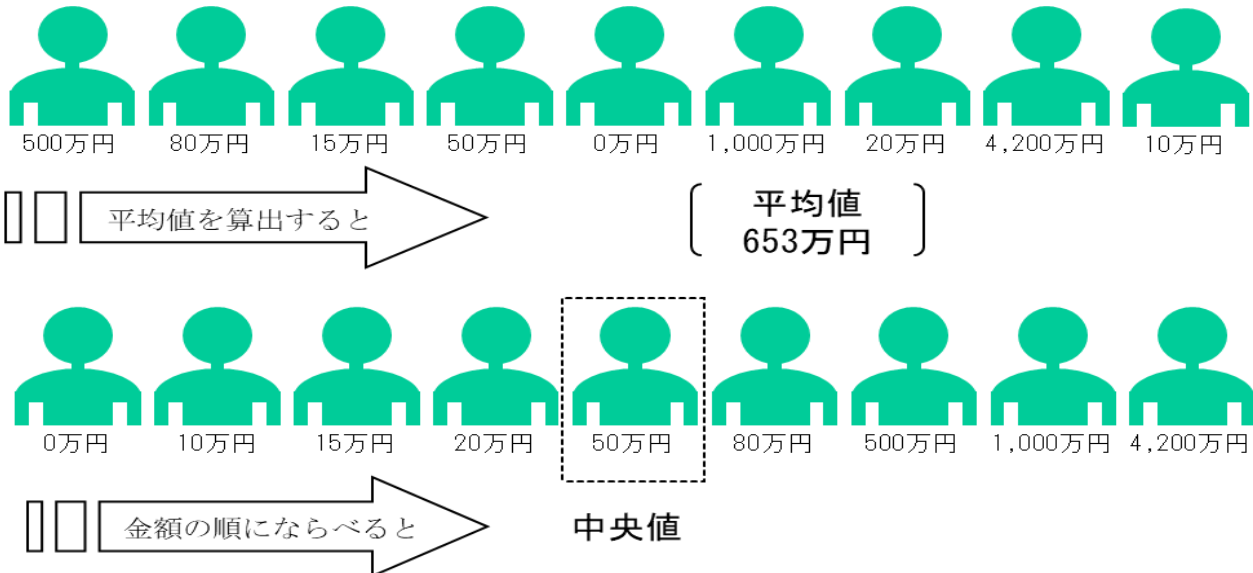
- ① 平均年齢は44歳、男性が約6割、女性が約4割となった。
- ② 就業状況については、フルタイム雇用の就業者が6割弱、就業先の産業分類はその他サービス業が4割弱ともっとも多かった。
- ③ 過去1年間の手取り収入（税引後）は、平均値が260万円、中央値が239万円となった。

【BOX 2】平均値と中央値

下の例をみると、金融資産保有額の平均値は653万円となるが、金融資産保有額が653万円を超えているのは2世帯だけなので、ほかの7世帯は「自分はそのそんなに多くの金融資産をもっていない」と感じるだろう。

このように、平均値は少数の高額資産保有世帯によって大きく引き上げられることがあるため、平均値だけでみると、多くの世帯が実感とかけ離れた印象をもつのである。今回調査では、金融資産保有額の平均値は653万円であったが、保有世帯（金額無回答を除く）が1,510世帯、非保有世帯（保有額＝0万円とみなす）が904世帯であり、全世帯（金額無回答を除く）のうち8割弱が平均値よりも保有額が少なくなった。

このような平均値の持つ欠点を補うために、ここでは平均値と並んで中央値を用いて一般的な家計像を捉えることとする。ここで言う中央値とは、調査対象世帯を金融資産保有額の少ない順（あるいは多い順）に並べたとき、中位（真ん中）に位置する世帯の金融資産保有額のことである。例えば自分の金融資産保有額が中央値（下の例では50万円）である世帯からみると、保有世帯のちょうど半分の世帯が自分の金融資産保有額よりも多くの金融資産を保有し、ちょうど半分の世帯が自分の金融資産保有額よりも少ない金融資産を保有していることになる。従って、中央値は世帯全体の実感により近い数字になると考えられる。今回調査では、金融資産保有額の中央値は50万円となっている。



（参考）2020年における金融資産保有額の分布は、以下のとおりとなっている。

金融資産保有額別世帯数	0	1～100万円	～200万円	～300万円	～400万円	～500万円	～600万円	～700万円
	904	431	172	108	99	72	69	58
	～800万円	～900万円	～1000万円	～1200万円	～1400万円	～1600万円	～1800万円	～2000万円
	43	38	26	65	33	36	19	23
	～2200万円	～2400万円	～2600万円	～2800万円	～3000万円	～3500万円	～4000万円	～4500万円
	22	23	13	9	11	29	17	16
～5000万円	～6000万円	～7000万円	～8000万円	～9000万円	～1億円	1億円以上	金額無回答	
6	16	14	11	4	11	16	86	